

平成艸紙



おりおりの記

黒部を訪ねて

野村證券
代表執行役社長

永井 浩二

昨年、黒部溪谷を訪問する機会に恵まれた。

下界は猛暑だというのに、初夏の黒部はヒンヤリとした肌心地。黒部ダム展望台からのパノラマは圧巻で、迫力あるダム放水を五感で堪能することが出来る。

学生時代、冬はアルバイトで八方尾根のスキー場に住込み、夏は幾度となく後立山連峰を縦走した私にとって、北アルプス一帯はかつての馴染みの場所といえるが、就職してからは足が遠のいた。今回の訪問は、実に30数年ぶりである。

数年前に大阪に駐在した際、お誘いを受けながら果たせなかったが、今回は念願叶い、関西電力さんの御厚意に甘え、黒部ダムから宇奈月に抜ける保守・工事用ルートを見学することができた。

「黒部に水力発電所を」という挑戦は大正時代に遡る。

欧米列強のキャッチアップという国家的大命題のもと、黒部川水力発電所建設という一大プロジェクトが発足した。急峻で豊富な水量を擁する黒部は、水力発電にとっては絶好の地理的条件であったが、人間にとって、黒部はまさに地獄そのものであったようだ。“黒部にケガ無し”（落ちたら死に直結）と言われる険しい難所を使わざる得ない資材運搬や、発破用ダイナマイトが自然発火し

てしまう高熱岩盤を掘進む隧道工事等、この一大プロジェクトは、戦争に突入していく当時の世情と重なり、多くの人々に尊い犠牲を強いることとなった。

その後、戦後の急速な経済復興により生じた電力不足を補うべく、黒部溪谷上流に巨大ダムを作る、通称「黒四」の開発が新たに決定される。

ダム建設のための大型機材搬入に必須な大町側からのトンネル工事が、立山の地下水を大量に含んだ破碎帯に阻まれ困難を極めた様は、映画『黒部の太陽』で描かれた通りだ。

人間が大自然に挑んだ黒部開発を目の当たりにし、先人達の大きな構想力に改めて感嘆するとともに、人間は強い信念を持ち続けることにより、「点滴岩^{うが}を穿つ」の如く、どんな困難な事も成し遂げることが出来るということを、久々に北アルプスの大パノラマを眺めながら、改めて実感した次第である。

